神野の土井昭雄家の板碑群調査の報告

蕨　由美

2020 年 6 月 27 日、当会の村田一男顧問の呼びかけで、10 時に 8 名の会員が集まり、土井昭雄氏のご厚意で、同家所蔵の板碑群の調査を行いました。

午前中は、納屋と庭先をお借りして、保管場所から運び込んだ板碑を洗い、村田顧問の指導で、分類と計数を行い、午後からは 1 点ずつ、計測と梵字・装飾・銘文をカードに記入、拓本採りと写真撮影を行い、午後 3 時過ぎに終わりました。

この板碑群は、本年 2 月 22 日の神野地区のフィールドワークで土井家に立ち寄った際に見せていただいたものです。同家敷地内保管の多量の中世板碑群で、未報告の板碑群であったことから、今回の調査となった次第です。

「板碑」とは、板状の石材に仏像を表す種子（しゅじ）や被供養者名や年月日を刻んだ石塔で、鎌倉時代から室町時代の仏教の供養塔です。

今回調査したのはすべて「武蔵型板碑」で、秩父産の緑泥片岩を使用し、頭部が三角で二条線を刻み、薄く長細い形をした関東に多い板碑です。

調査した板碑の総数は 121 点、うち無刻で上下不明の断片 35 点を除くと、基数は 86 基以内と推定され、ほかに小型の五輪塔の空風部分がありました。

有刻の完形碑 12 基と、上部または下部の断碑で銘がありそうな板碑数点の拓本を採り、種字や年銘を調べました。

種字はすべて阿弥陀如来を表す「キリーク」一尊で、蓮座を伴い、中には花瓶の表現が残っているものもありましたが、被供養者名の銘はありませんでした。

年銘のあるのは 9 基で、北朝年号の延文二・三・五年（1357～60）、長禄五年（1461）と寛正六年（1466）が各 1 基、文正二年（1467）が 2 基、文明九・十年（1477～78）が各 1 基でした。

千葉県の武蔵型板碑の年銘のピークは 14 世紀中葉と 15 世紀後葉にあり、今回の調査例も同じ傾向でした。

また「長禄五年」銘碑は、月日の数字がなく、同 4 年 12 月に寛正に改元されていることから、半製品と思われます。

その他、キリーク一尊と弧状線の略式蓮座のみの粗雑なもの十数基、また完形でありながら、無刻で粗雑な小型の板碑が 11 基ありました。このような無刻の板碑は、印西市の吉田天神前遺跡出土の板碑群でも多く見られ、本間岳人氏は「粗雑にみえるがあくまでも製品であり、板碑として造立されたもの」と推定されています。（「印西の中世板碑をさぐる」『印西の歴史』第 12 号 2020・3）

延文二年（1357）銘

長禄五年（1461）銘

神野では、これまで小名木淳家の康永三年銘ほか 13 基、土井秀雄家墓地の延文銘ほか 10 基、福田広家の 2 基の武蔵型板碑（種子は全てキリーク）が、また神野新山から玉蔵院に移された胎蔵界大日如来の種子「アーンク」と多数の戒名を刻んだ南北朝期（推定）の大型の下総型板碑が報告されています。（『八千代の歴史 資料編 原始・古代・中世』1991）

これらの既報告例に合わせ、今回の調査結果と分析によって、神野の中世の信仰の姿と時代背景がより詳しく見えてくることが期待されます。